

## 第四十回学術大会発表要旨

### 「永劫回帰」における死

——ハイデガーの『ニーチェ1』、

『存在と時間』を手がかりに——

(筑波大学大学院)

丸 山 徹

ニーチェの永劫回帰思想は、今この瞬間は無限に繰り返される、という思想であるが、これは一度きりの生とその消滅および永遠の無という生と死についての一般的な観念と対立すると考えられる。では永劫回帰思想において死は乗り越えられるのだろうか。本発表では、ハイデガーの『ニーチェ1』『等しいものの永劫回帰』と『存在と時間』における「時間性」および死についての議論を比較することを通じて、ハイデガーの解釈した「永劫回帰」思想における死の位置づけを探求し、不可避に思われる死の乗り越え可能性について論じる。

『ツアラトウストラ』の「幻影と謎」で、ツアラトウストラは門道とそれを挟んで永遠に延びる二つの道について「この二つの道は永遠に相いれることはないのだろうか？」と問う。侏儒が、すべての真理は曲線であり時間もまた円環であると答えると、これに対しツアラトウストラは「見よ、この瞬間を！」と答えて、門道からうしろへ永遠に続く道の中で起こりうるすべての出来事と「この瞬間」自体を伴って無限に回帰することがそれらすべての出来事と「この瞬間」自体を伴って無限に回帰することを告げる。

ハイデガーは『ニーチェ1』において、侏儒は門道（瞬間）において二つの道が「鉢合わせ」しているというところを見落としているという。

「この瞬間」の外に立つ侏儒にとって「今」は無限に同様によつて来ては過ぎ去るものにすぎない。一方ツアラトウストラは「将来と過去の衝突」である「この瞬間」のうちに立つ。それは「将来のうちへと入り込んで行動し」「同時に過去を肯定する」ことであり、何が回帰するかをその「瞬間」が決定するという。

『存在と時間』においては、現存在はおのれの最も固有な、没交渉的な、追い越しえない存在可能性としての死に直面し、そこから不断に逃避しているとされる。現存在はこの死へと先駆することによつて、本来的に、全体的に存在しうるのである。こうした先駆的決意性は、現存在が「おのれの最も固有な可能性においておのれへと到来」し、その限りで「本来的に既在しつつ存在している」ことができることにおいてのみ可能である。本来的な時間である「時間性」は、このように「既在しつつ現成化する到来」として「時熟」する。

以上のような『ニーチェ1』と『存在と時間』の議論を比較したとき、「瞬間」のうちに立つ」とは、おのれの最も際立った存在可能性である死へと先駆し、それを可能性として耐えつつ、すでにそこに存在したおのれを取り返すこと、つまり「本来的に到来的におのれの既在であること」であるといえるのではないか。

同一物の永劫回帰において、おのれの最も固有な存在しうることに直面しそこから逃避する侏儒にとつては、死は存在の断絶として無限に繰り返されるのであり、おのれの存在可能性としての死を引き受け耐え抜くツアラトウストラは、永遠を含んだ「この瞬間」のうちに立つのである。

## ハイデガーにおける

### 世界内存在と超越の問題について

(筑波大学大学院) 松島 恒 熙

本発表では、現存在が世界に存在するとはそもそもどのような事態なのか、ハイデガーの「世界内存在」や「超越」概念を参照しながら考察した。

まず、ハイデガーの「世界内存在」という概念に着目する。ハイデガーは現存在の存在体制を「世界内存在 *In-der-Welt-sein*」として規定しているのだが、その「内存在 *In-Sein*」とは、「コップの「内」にある水、ダンスの「内」にある衣類のように、他の存在者の「内」にある存在者の存在様式」(SZ 54)としての空間的関係を示すものではない。むしろ、「*In*」は *inman* に由来し、住む、居住する、滞在するということであり、「*an*」は、私は慣れている、何々と親しんでいる、或ることに従事している (SZ 54) ことを意味する。すなわち現存在は、身の回りの有意義な存在者と交渉しながら存在しているのである。

そしてそのような有意義な世界は、不安という現存在の根本気分において「完全な無意義性という性格をもつ」(SZ 186)とされる。しかしながら世界が無意義化されるということは、世界が不在になるというわけではなく、むしろ現存在は無意義化された世界においてなお世界内存在することを強いられる。「決意性は、本来的な自己存在として、現存

在をその世界から引き離したり、宙に浮いた自我へと孤立させたりはしない。「中略」というのも本来的開示性として、世界内存在として以外はけつして本来的に存在することがないからである」(SZ 298)。それでは、ハイデガーにおける本来的な世界内存在とはいかなるものなのか。

その手掛かりとなるのが、ハイデガーの「超越」概念である。ハイデガーは一九二九年講義「形而上学とは何か」において、不安における世界の無意義化のことを「超越」とも呼んでいる。「無の内へ自身を投げ込んで保ちつつ現存在はそのつどすでに全体としての存在者を越えている。存在者を越えていることを我々は超越と名づける」(GA9, 115)。この「超越」において現存在はどこへ向かって越えていくのであろうか。ハイデガーによればそれは、「世界」へである。「われわれは、そこへ向かって現存在が現存在として超越するところを世界と名づけ、そして超越を世界内存在することとして規定する」(GA9, 139)。

そしてこの「超越」としての世界内存在することを、ハイデガーは『哲学入門』において「賭け／遊び *Spiel*」として語るようになる。「賭ける／遊ぶことを私たちは世界内存在すること、超越と呼ぶ」(GA27, 316)。世界内存在とは、まさに「賭け」であり「遊び」である。本発表ではこの「賭け／遊び」概念が現存在の本来性における世界内存在を意味しうることを指摘した。

## うらみと「甘え」の欲求

(筑波大学大学院) 岸本 崇

私たちが誰かを／何かを「うらむ」とはどういうことなのだろうか。本発表は土居健郎『「甘え」の構造』を「うらみ」解釈の中心に置き、うらみの根底にある精神状態を明らかにすることを目標とする。

「うらみ」は他者から与えられた「不当な仕打ち」に対して起こってくる感情であるが、一般的に想像されるような「報復をする」といった手段によっては、実は解消されえない。

土居健郎は「うらみ」を「甘えが拒絶されたということで相手に敵意を向けること」と述べ、「甘えられない心理」に関するものとして定義している。他者との一体感を求める「甘え」は誰もが持っている欲求であり「依存」と異なり、それ自体としては否定されるべきものではない。しかしその欲求が満足するかどうかは、甘えを受け入れる側の他者次第であり、甘えは傷つきやすく非常に不安定な性格を持っている。したがって、実際に拒絶されたり、受け入れてもらえないのではないかと疑惑を抱いたりすると、甘えは容易にうらみへと転換する。このように、うらみが発生する発端には他者と繋がりたいう欲求があるため、真に「うらみが暗れる」ためには、他者との一体感を求める欲求を回復する必要がある。

うらみに囚われたまま、自分自身を被害者の立場におき、相手を加害

者として非難し仕返しすることによっては、何一つ問題は解決しない。だがうらみを抱いている人にとつて、自分自身が他者に依存している事実は曖昧なままで明らかになつていない場合も多い。まずは自身の「孤独感」やそこから由来する相手への欲求に自覚的になるべきであろう。

そのためには恨みに陥りやすい受け身的姿勢を改める必要があると考えられるが、ここで注意したいのは「依存心を断ち、独りで生きるべきだ」と言うだけでは片手落ちとなつてしまうことである。なぜなら他者と繋がりたいという欲求自体は自然なものであり、むしろそうした欲求の抑圧こそが、うらみを抱くに至るまでに問題を深刻化させたからである。

自身の感情や欲求を否定することなく、うらみや依存のようなねじれた関係ではない、互いに自立した人間同士の健全な信頼関係に基づいたかわりあいが可能となるような在り方を、模索していく必要がある。

## ジョン・ペツカムと世界の永遠性

(日本学術振興会／慶應義塾大学) 石田隆太

本発表の目的は、ジョン・ペツカムという中世ヨーロッパのスコラ学者が世界の始まりに関して述べている議論を詳しく分析することにより、その哲学的な含意を汲み取ることにある。世界の始まりに関するペツカムの立場について言及する研究はたしかに多数あるものの、彼の議論を単独で詳細に分析したものは見当たらない。それゆえ、彼の議論そのものを批判的に紹介することを通じて、ペツカムが与している哲学的な考えについての見取り図を描くことを目指した。

古代ギリシアにおいて、世界は生成したと『言うプラトン』（『ティマイオス』）と、それは永遠のものだと言うアリストテレス（『天について』、『自然学』）の間には、世界のあり方に関する或る一つの対立が見られる。それは、世界には始まりがあるのか否かという問題として定式化できる。この問題は中世ヨーロッパにおいて、理性と信仰、ないし哲学と神学という二つの機軸を新たに備えて再び議論の対象となった。例えば印象的なことに、世界の永遠性という学説は、他の十二の学説とともに、一二七〇年にパリ司教エティエンヌ・タンピエによって出された文書において排除されるべきものだという烙印を押されている。タンピエがこうした方向を一二七七年のさらなる禁令によってより強めることになった一つのきっかけは、パリ大学（特に学芸学部）におけるアリスト

テレス哲学の受容だろう。中でも、当時学芸学部に所属していたブラバンティアのシゲルスとダキアのポエティウスという二人の人物の活動が知られている。「ラディカルなアリストテレス主義」ないし「異端的なアリストテレス主義」として後世に理解される彼らの立場は、世界の永遠性を容認するがゆえに、カトリックの教義である無からの創造に抵触するものだと思なされた。その結果、この二人はパリを逃れることになった。

それに対して、ラディカルなアリストテレス主義者ではないスコラ学者たちは、世界の永遠性という学説に対してさまざまな態度を示している。トマス・アクィナスは、信仰のうえでは世界に始まりがあることを認める一方で、理性的には世界に始まりがあるかどうかは論証できないと考えている。トマスのこの主張は基本的に、『神学大全』を書く前から保持されていて、その後にも保持されることになるものであり、哲学的には不可知論だと言える。その基本的な路線は、『世界の永遠性について』という小著でも繰り返されている。

これとは反対に、トマスが『世界の永遠性について』を書くきっかけをおそらく与えた一人が、世界に始まりがあることは信仰箇条として受け入れたうえで、そのことを理性的に証明もできると主張していた。その人こそ、われわれの主役ジョン・ペツカムである。

## 内的義務とは何か

——カントの義務論からヴォルフ学派の義務論への廻行

(筑波大学) 千葉 建

本発表は、カントが『道徳の形而上学の基礎づけ』で言及した「内的義務」の意味を明らかにすることを目的とし、そのためにヴォルフ学派の義務論、とりわけマイアーの『一般実践哲学』（補助的にパウムガルトンの『第一実践哲学の原理』）における「義務」（Pflicht, officium）および「義務づけ」（Verpflichtung, obligatio）の概念の分析を行った。

ペイトンを始めとする従来の研究では、カントにおいて「内的義務」は「自分自身に対する義務」を意味し、「外的義務」は「他人に対する義務」であると解釈されてきた。しかし、内的義務／外的義務、完全義務／不完全義務という区分は、カントが言うように「学校で受け入れられている用語法」だとすれば、当時の大学を席卷していたヴォルフ学派における用語法を確認しておくことは決して無駄ではないと思われる。実際、仮に内的義務Ⅱ自分自身に対する義務、外的義務Ⅱ他人に対する義務という説が正しいとすれば、内的外的義務や外的内的義務は形容矛盾であるから、「自分自身に対する外的義務」や「他人に対する内的義務」は存在しないはずである。ところが、たとえばマイアーの『一般実践哲学』§285では、内的義務として、自分自身に対する義務のほかに、神に対する義務や、他人に対する義務、さらには人間以外の有限な存在

者（天使、動植物、無生物）に対する義務があげられている。それゆえ、ここでは内的義務／外的義務の区別は自分自身に対する義務／他人に対する義務の区別とは一致しないのである。

それではヴォルフ学派において内的義務とは何か。これを解明するためには、「義務」と「義務づけ」との違いを押さえておく必要がある。義務づけとは「ある自由な行為へと道徳的に強要すること」（マイアー、§67）であり、義務とは「義務づけられる自由な行為」（マイアー、§186）を指す。義務づけのうちで、不本意な行為への義務づけは「道徳的強制」であり、これが不履行時に他人による「威圧」（Erpressung）と結びついているとき、「外的義務づけ」と呼ばれる（マイアー、§133）。それに対して、こうした威圧への恐怖以外の動機に基づく義務づけはすべて「内的義務づけ」と呼ばれる（マイアー、§134）。ここで注意すべきは、内的義務は内的義務づけだけをもち、外的義務は外的義務だけでなく内的義務づけをもつ、ということである。こうしたヴォルフ学派の義務論は、他人が外的に強制できず、内的な義務づけだけが可能な「内的義務」の領域に〈道徳〉を定位するとともに、「外的義務」に関する〈法〉の領域にも「内的な義務づけ」を導入することで〈法の道徳性〉を保証することができるという点に特長があるといえる。

最後に、ヴォルフ学派のこうした内的義務／外的義務、内的義務づけ／外的義務づけの区別の影響が、カントの『道徳の形而上学』における「徳の義務」と「法の義務」の区別にも認められることを示した。